

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2012 年 10 月 31 日

派遣者氏名（専門分野）	足立 和彦（ フランス文学 ）
-------------	-----------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	フランス 19 世紀末新聞紙上におけるジャーナリズムと文学との関係に関する調査 —モーパッサンと『ジル・ブラス』を中心に—
-------	--

派遣期間

2012 年 8 月 2 日 ～2012 年 9 月 30 日

訪問 研究 機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	フランス	パリ	パリ第 4 大学	マリアヌ・ビュリー准教授
	フランス	パリ	国立図書館	
	フランス	パリ	サント・ジュヌヴィエーヴ図書館	

派遣先で実施した研究内容

主にフランス国立図書館（ミッテラン館）において、19 世紀末フランスの日刊紙、特に『ジル・ブラス』紙（1879-1940）をマイクロフィルム上で閲覧することを主要な活動として行った。とくに、作家ギ・ド・モーパッサン（1850-1893）が記事の執筆を開始する 1881 年 10 月から翌年にかけての記事を調査した。

具体的には、まずこの新聞の特色を理解するために、数日にわたる全紙面の精読を行った。その後、モーパッサンと同じように紙面で活動していた作家、テオドール・ド・バンヴィル（1823-1891）、カチュール・マンデス（1841-1909）、アルマン・シルヴェストル（1838-1901）、ジャン・リシュパン（1849-1930）、ルネ・メズロワ（1856-1918）、エミール・ヴィルモ（1848-1883）および時評文家アンリ・フーキエ（1838-1901）、ジャーナリストのポール・ジニスティ（1858-1932）について、彼らの執筆状況およびその記事の性格について分析を行った。なお国立図書館休館の期間は、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館で調査を継続した。

これらの作家の文学活動を理解するために、文献目録の作成および、関連する論文の閲覧・収集も、国立図書館およびサント・ジュヌヴィエーヴ図書館において行った。また当時の文献に関して、とくに必要なものは古書店で購入した。

モーパッサン自身の『ジル・ブラス』紙上における活動については、紙面上の記事の掲載される位置の変化を辿り、時評文からフィクションにいたる記事の性質の変化との関係について検討した。またこの時期の記事における、時事的話題や雑報的性格に関しても分析を行った。そして、上記作家とモーパッサンとの相違について、比較考察を加えた。

研究を続ける中で、『ジル・ブラス』の性格が確定するまでの経過を確認することが重要と判断されたため、あらためて 1879 年 11 月 19 日の創刊号から 1880 年前半までの紙面を調査することとし、上記の作家の記事を中心に、その内容の検討を行った。

加えて、19 世紀のジャーナリズムについての研究論文の収集も、上記の 2 図書館において随時行うことで、有益な成果を得ることができた。

パリ第 4 大学では、快く受け入れを承諾していただいたマリアヌ・ビュリー准教授と面談し、研究内容について報告する機会を得た。研究方針について貴重な意見を頂くことができ、大変に有意義であった。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

本研究においては、『ジル・ブラス』紙面上におけるギ・ド・モーパッサンの役割、および他の作家との比較検討を通して、本新聞の特色を明らかにすると同時に、モーパッサンの特殊性を明確にすることを目的とした。実際の研究においては、創刊当時の新聞を精査することの重要性が明らかになり、その点で計画に多少の変更が必要となったが、それ以外の点ではほぼ計画通りに進行することができた。ただし、当時の新聞をマイクロフィルムで閲覧するには予想以上に時間がかかったため、調査範囲をさらに限定する必要が生じた。

『ジル・ブラス』紙は、多数の作家に自由に執筆を許すことで、当代随一の「文学的」新聞であることを謳い文句としていた。実際、バンヴィルやマンデスといった他の作家たちは、「読者を楽しませる」という新聞の趣旨に忠実に、好色な話題も含め、軽妙で機知に飛んだ記事あるいは創作を発表しつづけていたことが確認できた。1881 年 10 月にこの新聞に登場したモーパッサンの活動が、時評文から創作へと移行していく過程には、先行する彼らの影響関係を指摘できる。一人称の語りに見られる口語性や、読者と親しい関係を結ぶ語りの技法においても、新聞という媒体が大きな理由となっていることが確認された。

一方で、雑報記事的な内容を取り扱いながらも、単に読者の興味を惹くためだけでなく、そこに人間的意味を見出し、それを読者に問いかけようとする点において、モーパッサンの作品と他の作家のものとの間には明確な差異が存在している。高踏派詩人として既に名を馳せていたバンヴィル、マンデス、シルヴェストルや、同じく詩人としての活動が本領であるリシュパンにおいて、『ジル・ブラス』紙上での活動が余技的なものであったのに対し、モーパッサンにとってはこの紙面が彼の活動にとって重要な場であったこと、および新聞記事執筆についての目的意識の相違が、結果として作品の性質の差異を生み出したものと考えられる。

『ジル・ブラス』の調査を通じて、この時代に文学とジャーナリズムが密接な関係を結んでいたことが確認された。今後この点について、さらに対象を広げながら研究を進める予定である。

派遣後の研究発表の予定

日本フランス語フランス文学会春季全国大会（2013 年 6 月 1 日）

Cahiers naturalistes および *Bulletin Flaubert et Maupassant* への論文寄稿